都藝泥布

京都地名研究会　会報　第89号
令和7年12月13日　発行
題字「つぎねふ」（山城の枕詞）
揮毫　吉田 金彦氏（初代会長）
編集　京都地名研究会事務局

「都藝泥布」第89号をお届けします。9月28日、峰山地域公民館で開催した第65回地名フォーラムは、「丹波の文化を伝承する会」をはじめ、京丹後市のみなさまのご協力のおかげで盛会のうちに終了しました。この場をお借りして改めてお礼申し上げます。

さて、前号でもお知らせした会報のお届けの方法について、**次回からも紙媒体でのお届けを希望される場合は 1 月末までに前号で同封したハガキなどでお知らせください。**なお、今回は全会員に紙媒体で発送しました。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

講　演1　木簡からみた「丹後風土記残欠」
講演者　　藤村　裕孝　氏
（丹波の文化を伝承する会 会長）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

（藤村裕孝 氏）

長年、丹後・丹波地域の歴史研究を継続されてきた藤村氏の講演は、丹後の古代史研究の基礎資料である「丹後風土記残欠」や籠神社社家に伝わる海部氏系図（「本系図」・「勘注系図」共に国宝）の問題点を整理し、近年藤原・平城旧都他から出土した「木簡」資料との比較を通して、「丹後風土記残欠」や「勘注系図」の内容を批判的に検討するものであった。

和銅6年（713）に丹波国から分国された丹後国においても、同年に編纂が命じられた風土記は存在し、浦島伝説や羽衣伝説、天橋立伝承などが逸文として今日に伝えられている。これらとは別に問題の「丹後風土記残欠」は、本来の漢文ではない「被（られ）文体」が見られるなど多くの問題点があり、早くから偽書説が称えられていた。同様に「勘注系図」についても疑問点があることを藤村氏は指摘する。ただ、「本系図」に細かく注記を施した「勘注系図」は、江戸時代初期の写本であり、「本系図」解釈のための性格を考慮したうえでの附指定なのである。また、「丹後風土記残欠」記載の地名と考古資料としての荷札「木簡」記載の地名等の不整合についても、今後の発掘調査により新たな「地名」が確認できる可能性があり、地名の変遷と多様性を考慮する必要があろう。

ただ、藤村氏の講演は、地元愛に溢れており、氏のような郷土史家がおられる丹後が羨ましい限りである。　（中島　正　記）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

講　演2　丹波と鶴尾遺跡
講演者　　岡林　峰夫　氏
（京丹後市教育委員会文化財保存活用課課長補佐）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

（岡林峰夫 氏）

現在、京丹後市の文化財保護行政の中枢におられる岡林氏は、合併前の旧峰山町の文化財担当者である。氏の講演は地元峰山町「丹波」に所在し、自ら調査を担当した鶴尾遺跡の調査成果を中心に、丹後・

京都地名研究会への入会案内

千年の都、京都。ここを起点として近畿から国の内外に及び地名を広く細かく蒐集し、比較調査して、地名を学ぶ学会です。地名は歴史の鏡であり、文化を盛る器です。私たちの暮らしのもとにある地名に目を向けて、日本の文化と歴史認識をいっそう深め、地域の知的活性化に役立ちたいと念じます。年齢、職業などの如何を問わず、いつでも、どなたでも、地名文化に関心をもたれる方々のご参加を歓迎し、ご協力もお願いします。入会金不要。

詳細はホームページをご覧ください。

年会費	3000 円
賛助会員・理事	5000 円
家族会員	1000 円

お問い合わせ先

京都地名研究会事務局　入江　成治

Tel

E-mail：kyotochimei@gmail.com

会費納入先　口座名　ゆうちょ銀行

加入者名：京都地名研究会

口座記号番号：00910-1-160705

本会ホームページアドレス

https://kyotochimei.wixsite.com/kyotochimei